

純情乙女の溺愛レッスン

## 目次

- 純情乙女の溺愛レッスン
- 番外編 彼の暴走、彼女の我儘
- 番外編 自慢の恋人
- 番外編 彼女の心配、彼のおねだり

純情乙女の溺愛レッスン

## プロローグ

私は昔から、恋愛物語が大好きだった。

一番最初にそれを自覚したのは、たぶん幼稚園のころ。

当時、私は母が読んでくれるお姫様と王子様の絵本に夢中だった。

『かえで  
楓は本当に、この本が好きねえ』

『うん！ だって、王子様かつこいいんだもん！』

それは悪い龍に囚われたお姫様を救うため奮闘する王子様と、彼が救いに来てくれることを信じて待ち続けたお姫様の恋愛物語。読んでもらう度、幼心にときめきを覚えたものだ。

私もいつも王子様が……なんて、あのころは真剣に夢見ていたつけ。

そして、今も忘れられないのが小学校低学年の時に読んだ少女漫画だ。

幾多の困難に見舞われながら絆を深めていくヒロインとヒーローの物語で、二人は最終回でついに身も心も結ばれる。

子供向けの漫画だったから、もちろん直接的な描写はなかつたものの、一番最後のページで、二人は同じベッドの中で朝を迎えていたのだ。

当時の私は、二人が一緒にベッドに入つていった意味を正確には理解していなかつた。でも、真っ白い朝の光を浴びて幸せそうに寄り添い眠る二人の姿は美しく、憧れの恋愛の象徴として強く心に刻まれた。

私もいつか、こんな風に好きな人と素敵な朝を迎える日が来るのかな……つて。そう考えるだけでドキドキして、とても幸せな気持ちになれた。

それからますます恋愛物語が好きになり、中学生になつてからは少女向けの恋愛小説を読み漁つた。高校に入つてからは大人向けの表現がある小説や漫画、海外のロマンス小説なんかもたくさん読んだ。

どのお話もときめきに満ちていて、読んでいるだけで自分も素敵な恋愛をしているような気分になれた。読んだあとは切なさや愛おしさを感じながら、幸せな恋の余韻に浸る。それは、本当に楽しい時間だった。

そんな風に物語にばかり夢中になつていたから、現実の恋愛がまったく上手いかなかつたのかかもしれない。

恋愛物語に憧れていた割に、私の初恋はとても遅かつた。  
物語のヒーローと比べると、現実の男の子は子どもっぽくて意地悪で、ちつとも惹かれなかつたのだ。

同じクラスの何々君より、あの漫画の何々君の方があずつと恰好良い！ あの小説の何々君なら、

こんなデリカシーのないことを言つたりしない！

こう考えてしまって、どうしても現実の男の子を好きになれなかつたのだ。

高校生くらいまでの私は、そんな風にちょっと拗らせた女の子だつた。

当時はそれなりに楽しい学生生活だつたけどさすがにこれじゃあ……と現実に目に向けるようになつたのは、大学に入つてから。

周りの友達が、当たり前に彼氏を作つて恋愛をおうか謡歌うたごしている姿に焦つたというのもある。

そして私は、友達の紹介で知り合つた大学の同級生と付き合つた。

彼は少し強引なところもあつたものの、お洒落しゃれで恰好良くて、私は生まれて初めてできた彼氏に夢中になつた。初恋、だつた。

これで、ついに憧れていた恋愛物語の主役になれたんだと、舞い上がつていたのだ。

喧嘩けんかをすることもあつたけど、私達はこれからも交際を続け、ゆくゆくは結婚するものと信じていた。だって、私は彼のことが大好きで、彼も私のことを大好きだと……そう思つていたから。

だけど、現実は物語のようには上手くいかなかつた。

彼はよりもよつて、私が親友だと信じていた女と浮気したのだ。

ある日、私は彼を驚かせようと思つて、連絡せずに彼のアパートを訪れた。そこで、彼と親友が裸で抱き合つているのを見つてしまつた。

泣きながら浮気を責めた私に、彼は開き直つた顔で言つた。『お前が悪いんだ』と。

『誘つてもちつともやらせてくれないし、変などこ真面目まじめでうるさいしさー』

誰かと付き合うなんて彼が初めてだつた私は、性経験もなかつた。そして、彼になかなか身体を許すことができなかつた。

だつて、怖かつたのだ。

それに、自分が処女であると告白することも恥ずかしくて、彼に誘われてもやんわりと断つてしまつていた。

けれど、彼の言葉を聞いた私は申し訳無い気持ちになつた。

そうか、拒み続けていた私が悪かつたのか。

恋人が心だけでなく身体も結ばれたいと思うのは自然なことだと、さんざん恋愛物語の中で学んできたのに、私の理解が足りなかつた。いつか勇気が持てたら……と先延ばしにして、彼の気持ちを無視していた私が悪かつたのだ。

そう考えて頃垂うなだれる私に、彼はさらなる追い打ちをかけた。

『遊んでそうに見えたから、すぐやれると思つて付き合つたのに。がつかりだわ』  
『え……？』

私の顔立ちちは、確かに少し派手かもしれない。どちらかというと小心で内向的な性格に反して、相手に軽薄な印象を与えるのだとか。

これまで見た目で誤解されることは多かつたし、それが嫌なのだと彼に打ち明けたこともあつたはずなのだが、理解してくれていなかつたらしく。結局、彼が望んでいたのは見た目通りの、すべてに身体を許す軽い女であつて、奥手な私は期待外れだつたというわけだ。

今まで信頼と愛情を向けていた相手が裏でそんなことを思っていたという事実に、私は目の前が真っ暗になつた。

さらに彼は親友に何か吹きこまれていたのか、『つかさ、どうせお前だつて他の男とデキてんだろ。神崎先輩だつけ？ 倭ばつか責めんじやねーよ。お互い様だらうが』と言い捨てた。

その先輩とは確かに仲良くさせてもらつていて、誓つて男女の関係ではない。

しかしどんなに否定しても、彼は私の言葉なんて信じなかつた。

これまでなんとなく惰性で付き合い続けてきたけど、浮氣もバレたし、ちようどいいから私と別れて浮氣相手と付き合うと、彼はそう言つた。

私は、恋人と親友をいつぺんに失くしてしまつたのだ。

それ以来、私は人を好きになるのが怖くなつた。好きになつて、また手酷く裏切られるかもしれないと思うと、不安で堪らなくなる。

私は、再び恋愛物語の世界に夢中になつた。

物語は恋の切なさや苦しさ、そして喜びを伝えてくれる。けれど、決して私の心を傷付けることはない。

だから、これでいいじゃないかと思つた。

実際に恋愛なんてしなくとも、物語を読んでいるだけで、私は十分幸せな気持ちになれる。

恋人なんかいなくたつて、生きていく。

そんな風に初恋の痛手を拗らせてはや数年。

私は相変わらず恋人ができるないまま、大学卒業後に入社した会社で働いている。

恋人のいる友人や、結婚して家庭を持つた友人を羨ましく思う時もあつた。けれど、仕事はやりがいがあるし、一人の生活は気まで自由だし、それなりに楽しく生きている。

これから先もずっと、こうして一人で生きていくのかもしれない。

それはちょっとした不安を伴うものの、今の時代、一生独り身の人間なんてそう珍しくもないし、

なんとかやっていけるだろう。

私にとつて恋愛は、現実のものではなく物語の中にあるもの。

そう、現実の私には縁遠いもののはず……だったのに！

それが何を間違つて、私なんかが人様に恋愛指南をする羽目になつたんでしょうか……？

(うう……頭が痛い……)

私は酷い頭痛とともに目を覚ました。

あー、昨夜つい飲みすぎちゃつたんだっけ?  
二日酔いで始まる朝なんて、残念すぎる。

(あれ?)

ふと、私は違和感を覚えた。

寝室の天井って、こんな感じだったかな?

それに、布団の感触もなんだかいつも違った気が……

「んん……?」

私は痛む頭を抱えてもそりと起き上がった。そして室内を見回し、「えっ」と驚きの声を上げる。  
(こ、ここ、私の部屋じゃない!)

私がいるのは、まったく知らない部屋の、まったく知らないベッドの上だった。

どこかのホテル……ではないようだ。誰かの寝室らしきこの部屋には、ノートパソコンが置かれ  
たシンプルなパソコンデスクと椅子、本棚、それからベッドがある。家具はすべて黒を基調に揃え

られていて、枕とシーツは白、布団カバーは無地のグレーだ。

(これ、どういう状況……)

私はどうして自分の部屋ではない場所で寝ているのか。  
そもそも、ここはどこなのか。

「ええと……」

私は必死に昨夜の記憶を思い出そうとする。

(確かに昨日は仕事帰りにお気に入りのバーでお酒を飲んで……)  
すると、コンコンと扉をノックする音が響いた。

「失礼します」

(……!?)

低い男性の声に一瞬身構えてすぐ、扉を開けて現れたのは見覚えのある男性だった。  
(この人は……)

昨夜バーで会つて、一緒にお酒を飲んだ人だ。

えつ、ここは彼の部屋なの? 私が寝ているのは、彼のベッド?

「目が覚めたんですね。おはようございます」

「お、おはようございます……」  
つて、呑氣に挨拶してた場合じゃないって!

(ま、まさか、これは……!)

恋愛物語でよくある、「一夜の過ち」パターン!?

酔っ払い、行きずりの人と一線を越えて、見知らぬベッドで目覚めるという、あの有名な……！えつ、ということは私はもしかして、彼とその、致してしまったのだろうか？そして彼のベッドの上で朝を迎えたと？！

(ひえええええ！ そんな、嘘でしょーー！)

ま、待つて。落ち着いて。そうだ、まずは落ち着け、落ち着くんだ。ヒッヒッフーフ、これは違う！ そうじやなくて、ええと、ええと、深呼吸！ 大きく息を吸つて、吐いて、吸つて、吐いて……

冷静に、昨日あつたことを思い出すんだ。

確かに私は昨日、仕事が終わつたあと……

(あー、今日も一日よく働いたなあ)

十月に入つて、最初の金曜日のこと。

私、齊藤楓はパソコンでの入力作業を終え、自分のデスクで思いきりうーんと伸びをした。

今日の仕事はこれで終わり。データを保存したのちパソコンをシャットダウンする。デスクトップにしている猫の癒し画像が消え、画面が黒く染まつた。

「はあ」

ずっとパソコンと睨めっこしていたから、目が疲れている。私は鞄から目薬を取り出すると、上を

向いて目にぽとりと差した。うあー、沁みるねえ。

目の端から零れた目薬を指で拭いながら壁の電子時計を見ると、すでに夜の八時をすぎていた。我が社の終業時間は六時だから、二時間残業したことになる。残業代が出るからいいけど。

それに明日は土曜日だ。先週は休日出勤になつてしまつたけれど、明日は休み。明後日も休みだ。

それを思えば、ここ一週間の疲れさえ心地良く感じてしまう。

(んふふ、明日は一日寝倒して、明後日は久しぶりに買い物にでも出かけようかなー)

休日の予定を考えつつ、いそいそと帰り支度を始める。

ああそうだ、買い物ついでに美容院にも行こうかな。肩下まで伸ばしている髪にゆるくパーマをかけているんだけど、それがどれ始めるんだよね。

それじゃあ、お先に失礼します。お疲れさまでした

「齊藤さん、お疲れ～」

フロアに残っていた他の社員に声をかけ、私は気分良く職場をあとにした。

私が勤めている会社は、新宿にあるビルのワンフロアに本拠を構えるIT企業だ。

主に企業向けのアプリ開発をやつていて、他にもソフトウェアやウェブサイトの企画、構築、顧客管理システムの開発と管理を手掛けている。社員数は二十二名と少数だが、業績は右肩上がりでお給料もなかなか良い。

私はここで社長秘書の肩書きをもらつてている。といつても、秘書業務だけではなく庶務や雑務もこ

なすなんでも係というのが実情だ。

この会社を立ち上げた社長は大学時代の先輩。内定が一つも取れず就職浪人になりかけていたところ、お情けで声をかけてもらったのが縁でお世話になつていてる。

最初のころは社長と私を入れても十人に満たない小さな会社だったのに、ちょっとずつ人や仕事が増えてきて嬉しい限りだ。まあ、人員が少數な分、ひとりひとりがやらなければいけないことも多くて大変だけど。

そうそう、先週なんて本当に酷かつた。納品期限を間近に控えたアブリに不具合が見つかり、システムエンジニア全員が休日返上でデバッグ作業に追われたのだ。

私はプログラミングに関しては戦力外だけど、その間、他の社員の事務仕事を肩代わりする羽目になつて、同じく休日出勤。なんとか期限に間に合つたから良かつたものの、先週はみんな目が死んでたなあ……

先週の忙しさを思い出しながら、私は会社の入っているビルを出た。そのまま駅には向かわず、ある場所を目指す。

せっかくの花の金曜日だからね。自分へのご褒美<sup>ほうび</sup>がてら、美味しいものでも食べて、美味しいお酒を一杯ひっかけてから帰ろうと思ったのだ。

目当ての店は会社から徒歩で行ける距離で、新宿の路地裏の片隅にある。

『BAR スクナ』、酒の神の名を冠するその小さなバーは、以前うちの社長に教えてもらつたお店だ。店内はカウンター席が七席、四人掛けのテーブルが三つのこぢんまりとした造り。さりげなく聞

こえてくるジャズの音楽が心地良い、落ち着いた雰囲気の隠れ家的なバーである。

ここはお酒はもちろん、料理もとても美味しいのだ。

重厚な木製の扉を開け、階段を下りて半地下の店内に入る。

店の中にはカウンター席の端におじさんが一人、テーブル席に若い女性客が一人いるだけだつた。空いていて良かつたと思いながら、私もカウンター席に座る。

「いらっしゃいませ」

「こんばんは、マスター。まずはナポリタンいただけますか?」

「はい、かしこまりました」

マスターはにつこりと微笑んで、私におしぶりを手渡してくれた。

この店のマスターは女性である。艶<sup>つや</sup>のある黒髪をボブカットにした、同性である私でも時々うつとりと見惚<sup>みと</sup>れてしまうほどの美人だ。清潔感<sup>せいきょくかん</sup>が漂う白シャツに黒のカマーベストがよく似合つていて、とても恰好良い。

(はあ、気持ち良い)

手渡されたおしぶりはちょうど良い熱さだつた。これで顔を拭いたらすつきりするだろうなあとオッサン臭いことを考えてしまうが、こんなお洒落<sup>しゃれ</sup>なバーでそんなことできない。何よりお化粧がドロドロになる。

「お待たせいたしました」

おしぶりをにぎにぎと弄びながら待つていると、ほどなくして熱々のナポリタンが前に置かれた。

タマネギとピーマン、ベーコンというシンプルな具材。それらをケチャップで絡めて炒めた、なんとも懐かしい香りが鼻腔をくすぐった。

（うわあっ、これだよこれっ！ これが食べたかったの！）

いただきますと手を合わせて、さつそくフォーケでくるくるとナポリタンを巻きとり、ぱくりと口に運んだ。うん、美味しい！ この甘酸っぱい感じがたまりません。

私は夢中になつてナポリタンを食べた。

（そろそろ、お酒も欲しいなあ）

ナポリタンを半分ほど食べたころ、私はお酒が飲みたくなつた。元々、ただ食事をするためだけにここへ来たわけではないので。

空きつ腹にいきなりお酒を入れると悪酔いしてしまうので食事を先に頼んだんだけど、そろそろ飲んでも良い頃合いだろう。

「ジントニックお願いします」

このバーでの一杯目はジントニックと決めている。

初めてこのお店に来た時に飲んで以来、私はマスターのジントニックにすっかり惚れ込んでしまつたのだ。

「かしこまりました」

私は食べるペースを少し落とし、目の前でジントニックを作るマスターを見る。

トールグラスに氷を入れ、ジンを注ぐ。そして冷えたトニックウォーターを注ぎ、軽くステアし

てスライスしたライムを飾る。その手際は何もかもが様になつていて、恰好良かつた。  
「お待たせいたしました」

「ありがとうございます」

さつそくジントニックを口にすると、柑橘の爽やかな香りがふわりと鼻を掠める。  
「美味しい」

思わずそう口にすると、マスターは美しい顔に微笑を浮かべ、「ありがとうございます」と頭を下げた。そんな仕草もまた恰好良い。彼女が男性だつたら確実に惚れていただろう。  
(あー、美味しいごはんに美味しいお酒！ 最高に幸せえ……)

ジントニックを飲みながらナポリタンを平らげ、二杯目にホワイトレディを頼む。こちらもジントニックと同じジンベースのカクテルで、ほんのりと色づいた乳白色が綺麗だ。

甘さがあつて、かつ爽やかに引き締まつた味。うーん、美味しい。

ホワイトレディに舌鼓したづみを打ち、お通しで出されたナツツをぱりぱりと齧る。ナツツはちょうどいい塩加減で、お酒がより美味しく感じられた。

そうしてゆっくりとここで時間を使っていると、新たな客が一組やつてきた。

ガーリー系ファッショனに身を包んだ若い女性と、サラリーマン風の眼鏡の男性の二人組だ。

女性は、綺麗に染めた茶色の髪を毛先で軽く巻いている。ナチュラルメイクの顔は少し幼げで、甘く可愛らしい雰囲気だ。

男性は、長めの前髪をきつちり七三に分けている。銀縁眼鏡をかけていて、なんとも生真面目で

誠実そうな人柄を思わせる外見だ。

(あ……)

なんとなく目を惹かれたのは、彼が今ハマっている恋愛漫画のヒーローにちょっと似ていたから。特に、考えていることがわかりにくそうな、冷たい印象の顔立ちが似ている。

地味な恰好だけど、よくよく見ればけつこう整った顔をしているイケメンさんだ。

(……っと、いけない)

ついまじまと見てしまい、私は慌てて視線を外した。

たぶん、二人は恋人同士なんだろう。

彼女連れの男性をあんまり見てたら失礼だよね。

「わあ～、こういうお店、一度来てみたかったんですね」

女性がやけに甘つたるい声で隣の男性に話しかけた。

一応声量は抑えているようだが、小さな店なので会話は筒抜けだ。

男性の方はといふと、整っているが堅物そうな顔を緩めもせず、「それならよかつた」と感情の籠らない声で答えていた。

(……ん？ 恋人同士……じゃないのかな？)

なんだか気になつてしまつて、二人の様子を窺つてしまう。

男性の態度には、恋人同士特有の甘さや気安さがまつたくない。ただの知り合いなのか、それともお見合いか何かで出会つたばかりの発展途上な関係なのかと、頭の中であれこれ推測してみる。

物語の中の恋人同士を見るのも好きだけど、現実の恋人同士を見るのもけつこう好きなんだよね。頭の中で勝手に二人の物語を妄そ……いやいや、想像して楽しんだり。

二人はテーブル席ではなくカウンター席に座つた。

私の席から一席空けて男性が、その隣に女性が座つている。

どうやら、彼らは最初の推測通り恋人同士のようだ。どこかの店でディナーを済ませ、女性がかねてより来たがつていたバーに、男性が初めて連れて来たらしい。

それだけ聞くと恋人思いで羨ましい限りだ。だが、きやつきやつとはしゃぐ女性に対し、男性の方は妙に暗いというか、どこか思い詰めた雰囲気だった。

「…………」

二人の間に漂う空気に不穏なものを感じる。それが気になつた私は帰るタイミングを逸し、三杯目のカクテルを頼んでいた。

「ねえねえ～、荻原さん、今度旅行に行きましょうよ。みなみ、沖縄に行きたいなあ」

男性の暗い表情に気付いているのかいないのか、女性——みなみさんはおねだりするみたいに猫撫で声で話しかける。

彼の人目を憚らない甘えた態度に、私は微妙な笑みを浮かべながら三杯目に頼んだソルティ・ドッグをちびりと飲む。グラスの縁についた塩とグレープフルーツの風味が抜群の相性で、とても爽やかなお酒だ。

少しの間があつて、男性が口を開く。

「旅行には、せきの関野さんと一緒に行つたらどうですか？」

「えっ？」

(ん……?)

恋人からの旅行の誘いにその答え？ 関野つて誰だ？ と、つい耳を澄ましてしまう。

何やら修羅場の予感がする。

「や、やだなあ。関野さんはただの同僚じゃないですか？」

「みなみさんはただの同僚とホテルに入るんですか？」

(ホ、ホテツ……!)

危うく口に含んだカクテルを噴くところだった。危ない危ない。

というかホテルって、みなみさん完全に浮気じやないの。アウトだよアウト！

「……なんで、それ……？」

みなみさんはぶるぶると震えながら俯いた。

即座に否定しないあたり、図星なのか。

「先日、偶然見てしました。関野さんに尋ねたら、先月から交際を始めたと。職場恋愛はバレると恥ずかしいので、秘密にしておいてほしいと言ったそうですね」

わ、わーお。職場内で二股ですか。やるな、みなみさん。

「…………」

みなみさんは答えない。ちらりと彼女の様子を窺つたが、俯いているので表情はわからなかつた。

「体どんな顔をしているんだろう。

それにしても、職場内で二股とか……

(酷いなあ……)

私の胸に苦い思いが込み上げてくる。

大学時代、初めてできた彼に浮気された当時の記憶が甦つてきたのだ。

もう忘れないのに、あの時味わった気持ちはなかなか消えてくれない。

今でもふとした瞬間に、じわじわと胸に込み上げてくることがある。

そういえば、風の噂で元カレと元親友が大学卒業後に結婚してすぐ離婚したと聞いたつけ。

彼らが今幸せだったら、自分はきっと、もつと惨めな気持ちになつていただろう。そんな他人の不幸に安心する自分の醜さにも嫌気が差す。

「……みなみ、悪くないもん……」

過去の苦い記憶に思いを馳せていたら、それまでずつと俯いていたみなみさんが顔を上げてそう呟いた。

いやいや、悪くないもん……つて。

私は呆れながらグラスを傾ける。

「……荻原さんが悪いんだもん。みなみに寂しい思いをさせるから」

みなみさんは男性——荻原さんがいかに恋人としてなつていなかつたかを語り出した。  
いく、一緒にいて楽しくないだの、真面目すぎてこつちまで肩が凝るだの、あんまりプレゼント

してくれないだの優しくないだの、まあ言いたい放題。

私は完全な部外者だが、みなみさんの言い分は聞いていて、とてもイライラした。

(大体、荻原さんに不満があるならきつちり別れてから次の人と付き合えばいいじゃない。なのに浮気するなんて、要するに二人の男をキープしていたかたんだしょ。不誠実すぎる)

私の元カレと同じだ。彼は私の親友に手を出しながら、浮気がバレるまで私とも平然と付き合っていた。

やがて、それまで黙つて話を聞いていた荻原さんが、口を開いた。

「……俺に原因があるのはよくわかりました」

まさか、みなみさんに謝るつもり? と、私は無関心を装いつつもちらちらと二人の様子を窺う。

「わかつてくれたらしいんです。みなみもお、ちょっとイケナイことしちゃったなって思うしい、荻原さんのこと、別に嫌いになつたわけじやないしい」

(ええー!)

今回の浮気を許しちゃうの?

真摯に謝りもせず、浮気を「ちょっとイケナイこと」とか言つてるんだよ? こういうタイプは絶対にまた浮気するのに、それでもいいの?

私が他人事ながら内心でヒートアップしていると、荻原さんが言った。

「いえ。俺はもうみなみさんとはお付き合いできません。関野さんとお幸せになつ」

「なつ」

(よく言つた荻原さん!)

みなみさんの疑惑に反し、きつぱりと別れを突きつけた荻原さんに、私は心の中で快哉を叫ぶ。お酒の一杯も奢りたいくらいだ。ほら、ドラマとかでよくある「あちらのお客様からです」つてやつ。

「なによ! せつかくみなみがアンタなんかと付き合つてあげたのに! ふざけんな!」

荻原の方から別れを突きつけられたことは、みなみさんのプライドをいたく傷付けたらしい。 彼女はそれまでのぶりっこから一変し、激昂して立ち上がりつた。

しかも自分の飲みかけのグラスを握り、その中身を荻原さんに向かつてブチまけ——

「わっ!」

「えっ……」

ブチまけ……たのだが、荻原さんが咄嗟に避けたせいで、その中身は思いっきり私にかかつてしまつた。

(……マジか……)

髪から滴る甘つたるい匂いのお酒。そういえばみなみさんが飲んでいたのはカルーアミルクだつた。よりによつてミルク系かよ。

せめて、もっとさらつとしたお酒なら……いや、たとえそれがただの水でも、他人からいきなりかけられるのはごめんである。

(人の修羅場を興味本位で覗いた罰かな、どほほだよ)

正確には覗いたというより、勝手に隣で繰り広げられちゃっただけなんだけど。

「すみません！ 大丈夫ですか!?」

荻原さんが慌てて私に自分のハンカチを差し出す。

私は「あ、ありがとうございます」とそれを受け取り、とりあえず髪を軽く拭<sup>ぬぐ</sup>った。顔にもかかつっていたが、そちらはマスターが渡してくれたティッシュでそつと拭<sup>ぬぐ</sup>う。ああ、服にもばつちりかかるてるわ。お酒臭い。

「み、みなみは悪くないもん！」

張本人のみなみさんは、そう言い捨ててこの場から逃げ出してしまった。

「うつわ、最低～」

そう呟いたのは、テーブル席に座っていた若い女性客だ。

荻原さんとみなみさんの修羅場<sup>しゆらば</sup>は、彼女達の耳にもばつちり届いていたのだろう。

うん、本当に最低だ。せめて一言くらい謝りなさいよ……と呆れながら、私はため息を吐く。

「本当に申し訳ありませんでした」

逃げ出した元恋人に代わって、荻原さんが深々と頭を下げる。

うん、まあこの人が避けたから私にかかっちゃったんだもんね。

それにしても、どうしようかな。拭いても髪はべたべただし、服も汚れちゃったし、これで電車に乗るのはちょっと……。お財布には痛いけど、タクシーを呼んで帰るしかないかなあ。

「お客様、よろしければ……」

どうしたものかと思案していると、マスターが救いの手を差し伸べてくれた。

なんでも、このお店の上の階はマスターの住居スペースになっているとかで、そこでシャワーと着替えを貸してくれるらしい。

そこまでしてもらつて申し訳無いと思いつつも、このままでは帰れないでの、マスターのご厚意に甘えることにした。

私がお願いすると、マスターはカウンターの端に座っていたおじさんに話しかける。

なんと、実はおじさんがこの店のオーナーなのだそうだ。マスターはお店を彼に任せると、私を連れて従業員用の扉を潜り、その奥にあつた階段で上の階に上がる。

お店もお洒落<sup>しゃれ</sup>だつたけど、住居スペースもお洒落<sup>しゃれ</sup>だ。美女の住む家はなんだか良い匂いがするなあなんて思いつつ、着替えとタオルを手渡された私は、浴室にお邪魔した。

マイク落としシートは化粧ボーチに常備してあるので、それで化粧を落としシャワーを浴びる。それからマスターに借りた着替えを着て軽く化粧をし、下の店に戻った。

お酒で汚れてしまつた自分の服は、浴室で軽く水洗いさせてもらつてから、マスターが用意してくれた袋に入れている。

店には、先に戻つていたマスターの他にオーナーのおじさんと、荻原さんがいた。

どうやら荻原さんは、私に謝罪するために残つていたらしい。

「あの、クリーニング代はもちろんお支払いします。本当に、なんとお詫びしていいか……」

荻原さんの謝罪に、私は首を横に振る。

「いえいえ。その、事故みたいなものですし。服も自宅で洗えますから、お気になさらず……」「ですが……」

これがみなみさん相手なら、慰謝料までふんだくつてやりたい気分。だけど、荻原さん相手だと、自分も昔同じような経験をしたせいか同情してしまって、あまり怒る気になれないんだよね。

「じゃあ、クリーニング代の代わりに一杯奢つて下さい。それでチャラつてことで」

私がにつこり笑つて提案するべ、荻原さんは一瞬驚いた顔をしたあと、ホッとした様子で微笑んだ。

「喜んで」

(あつ……)

彼が微笑むと、冷たく硬い雰囲気が和らいで、温かみのある表情になる。

(笑うとけつこう可愛いんだな、この人)

そのギャップにうつかりときめいてしまった。

でも、それは一瞬のことだつたし、一緒にお酒を飲むことになつたけど、どうせ一夜限りの縁だと考えていた。

それがまさかあんなことになるなんて、夢にも思わなかつたのだ。

## 二

(そうだ、それで私は荻原さんと一緒に飲んで、そして今……どうして荻原さんと一緒にいるの？ここ、たぶん、荻原さんの部屋だよね？ や、やつぱりあのあと、私は酔つた勢いで彼と致してしまつたのか！?)

私が悩んでいるのを、荻原さんは不思議そうな顔をしつつも、何も言わず見守っている。

やがて、未だ状況を計りかねている私に、彼は「朝食ができたんですが、いかがですか？」と告げた。よく見れば、荻原さんは白シャツを腕巻りし、黒いエプロンをつけていた。

「あ、はい。い、いただきます……」

それにしても、経験がないからいまいち確信は持てないのだが、私の身体は頭痛が酷いくらいで、他に違和感……特に下半身の違和感はないようだ。

服装も、昨夜バーのマスターに借りた服のままで乱れはない。

「……っあ！」

そういうえばと自分の顔に触れると、案の定化粧をしたままだった。これで寝入つてしまつたのか！

(いやああああ！)

「す、すみません。洗面所をお借りしてもいいですか？」

「はい。洗面所はこちらです」

荻原さんは快く洗面所に案内してくれた。

彼の住まいは1LDKで、寝室の隣がキッチンを備えたリビングダイニングになつていて。寝室とは反対側に、玄関と洗面所に繋がる扉があつた。

私はベッドの傍に置かれていた自分の鞄を手に、洗面所に籠る。

寝室やダイニングキッチンもそうだつたが、洗面所も男性の一人暮らしとは思えないくらい綺麗に整えられていた。

ごちやごちやつと物が散乱した私の部屋とは大違ひだ。

「うわ、酷い顔……」

鏡に映る自分の顔は、化粧が崩れて悲惨だった。

ひいい、口元に涎の跡までついている。

こんな顔を人様に晒したのかと思うと、恥ずかしさといったたまなさで深いため息が零れた。

それに、ファンデーションの下では肌が確実にダメージを受けているだろう。家に帰つたらパック決定だ。

まずはマイク落としシートで化粧を落とし、洗面台に置いてあつた石鹼を借りて顔を洗う。洗い上がりに少し肌がつっぱる感じがしたが、背に腹は代えられない。

できればシャワーも浴びておきたかつたけれど、さすがに昨日知り合つたばかりの男性の部屋でシャワーを借りるのは躊躇われた。

洗顔のあと、試供品として貰つた使いきりタイプの美容水と乳液で肌を整え、薄く化粧をする。「あの、ありがとうございました」

洗面所を出て、ダイニングテーブルの上に朝食を並べてある荻原さんに声をかけた。

「いえ、お気になさらず。簡単なものばかりですが、どうぞ」

（簡単なものつて……）

私はテーブルの上に並べられた料理を前にして、目を見開く。

濃紺のランチョンマットの上に、ぴかぴかに焼きあげられた白いご飯、シジミのお味噌汁、焼いた鮭の切り身に小鉢に入った大根と里芋の煮物、千切りキャベツとトマトのサラダ、小皿に盛られたナスのお漬物が置かれている。

しかも箸はちゃんと箸置きに置かれていた。どこの旅館の朝食ですか……

これ、全部荻原さんが作つたのだろうか。だとしたらすごいな。

私は勧められた椅子におずおずと座り、いただきますと手を合わせてから箸をとる。

「……美味しい……」

最初に口にしたのはシジミのお味噌汁だつた。一日酔いにはシジミのお味噌汁が効くとよく言われているが、確かに身体に沁み入る味だ。

「お口に合つたようでよかつた」

荻原さんはそれだけ言って、自分も箸を手にとつた。

（あ、お箸の使い方、綺麗だな……）

彼はまるで見本のような所作で、黙々と食事を続ける。

私も何を詰していいかわからず、気まずさを隠すために食事に専念した。

(うわ、鮭も絶妙な塩加減で美味しい！)

こんなしつかりした朝食を食べるなんて、どれくらいぶりだろうか。

仕事の日は、通勤途中で買ったコンビニのパンやおにぎりを会社で食べることが多い。それに休日も、昼まで寝てどこかにランチを食べに出て行くというパターンばかりだ。

荻原さんは、食後に緑茶と剥いた梨まで出してくれた。

(はあ、梨も美味しいな……って、デザートを美味しくいただいている場合じゃないでしようが！)

私がどうしてここにいるのか聞かなきや！）

梨をシャクシャクと齧りながら、私は場の雰囲気に流されまくっている自分自身にツッコミを入れた。

「あ、あのう……」

私は梨を食べ終えると、意を決して荻原さんに話しかける。

「実は私、昨夜のことをいまいちよく覚えていなくて……」

「え……」

荻原さんと出会つて一緒に酒を飲むことになつたところまでは思い出したんだけど、そこから先が思い出せない。

「す、すみません！ 私、何か失礼なことをしてしまつたでしょうか？」

まさか「私はあなたとセックスを致してしまつたのでしょうか?!」と聞くわけにもいかず、迂遠な言い方で尋ねる。

ただ、一つだけ言い訳させてもらうと、記憶をなくすまで飲むのはこれが初めてなんですよ！ 異性の部屋で目が覚めるなんて初めての体験です！ 朝食もデザートもペロリと平らげたけど、これでもけつこう混乱しているのですよ！

私の質問に、荻原さんも慌て出した。

「いえ、失礼だなんてとんでもないです！ 昨夜、齊藤さんは俺の愚痴を聞いて下さつて……」  
(あ、私の名前知ってるんだ……)

そういえば昨夜名乗り合つたつけと思つたところで、だんだんと記憶が甦つてくる。

そうだ、私はあれからバーで一緒に酒を飲みながら、荻原さんと話をしたんだつた。  
私も浮気されて酷い目を見たことがあつたから、荻原さんの愚痴が他人事に思えず、真摯に聞いたのだ。昔、落ち込んだ私に先輩や友人達がそうしてくれたように。

荻原さんは今回のみなさんに限らず、恋人はできても上手くいかないことばかりなのだそうだ。一方的にフラれたり、今回みたいに浮気されたりとか。  
うんうん、浮気されるのって辛いよね、悲しいよね……と相槌を打ちまくつた記憶がある。私もだいぶ酔つていたのだろう。

それで、酔っ払つた私が彼を二軒目に誘い、次は居酒屋に入つた。そこでさらにお酒を飲みつつ彼の話を聞いているうちに、だんだんと恋愛相談になつていつたんだつた。

「俺なんかの情けない話を、齊藤さんは親身になつて聞いて下さいました」

ああそうだ、そこで荻原さんの過去の手痛い失恋話も聞いたつけ。

それは彼が高校生のこと。同級生女子に告白されて、彼は生まれて初めて彼女ができた。

荻原さんは、彼なりに彼女と真剣に付き合っていたという。毎日連絡をとりたがる彼女に合わせて苦手なメールも返信は欠かさなかつたし、デートでは彼女が喜びそうな場所に行つた。多くない小遣いを工面してプレゼントも贈つたとか。

彼女はその都度喜んでくれていたので、交際は上手くいっていると思つていた。  
だが荻原さんはある日、塾帰りに寄つたファーストフード店で、彼女が友達に自分のことを悪く言つてゐるのを聞いてしまう。

メールのやり取りが素つ氣なくてつまらないとか、プレゼントのセンスがなくて喜ぶフリをするのも疲れるとか。

酷い話だが、『あいつキスが下手なんだよね』と友達と一緒に彼を馬鹿にして笑つていたんだつて。実際は、キスをしたことはなかつたそうなのに。

当然その彼女とは上手くいかず、ほどなく別れることになつたらしい。初めての彼女から受けた心ない仕打ちは思春期の荻原少年に深い傷を残し、以来、彼は女性にどう接していくかよくわからなくなつてしまつたのだという。

荻原さんは私と同じだ。初めての、本気の恋でとても辛い思いをした。

だから他人事とは思えず、なんとか励まそうと彼の相談に乗つたのだ。

女性はどうしたら喜ぶのかとか、どういう男性に惹かれるのかとか、そんな話を熱弁した記憶がある。

思い出してみると、昨晩の私はまるで恋愛上級者みたいな話しぶりだつたけど、それは酒の勢いの為せる業。本当の私は荻原さんより恋愛経験が少ない。話のソースは実体験ではなく、すべてよく読んでいる恋愛小説や恋愛漫画から学んだのだ。

なのに、荻原さんがそんな私のアドバイスを真剣に聞いてくれるのが嬉しくて、調子に乗つて色々な恋愛観を語つたようと思う。お酒つて怖いね。しらふ素面に戻つた今となつては、自分の言動に赤面ものだ。

とともにかくにも、盛り上がりすつかり酒を過ごしてしまつた私は、居酒屋で酔い潰れてしまつたらしい。

その日初めて会つた異性の前で酔い潰れるとか、自分の迂闊さが情けない。

送つて行こうにも住所がわからなかつた荻原さんは、仕方なく私をタクシーに乗せ、自分のマンションへ連れてきたのだそうだ。

「誓つて、不埒な真似はしていません」

荻原さんは真剣な顔で言う。

彼は私をベッドに寝かせると、自分はリビングダイニングのソファで寝たとか。

それを聞き、ちらつとソファを見たが、二人掛けサイズの黒のソファは、長身の荻原さんが寝るには少し小さい。

(うわあああ、なんてこと……！)

『ご迷惑をおかけしました！』

私は深々と頭を下げた。

酔い潰れた人間を運ばせた上に、家主のベッドまで奪つてしまつた。

それにしても、相手が紳士でなかつたらと思うと、今更ながらゾッとする。

「いえ、こちらこそ勝手な真似をして……！」

すると、荻原さんまで私に頭を下げて謝り始めた。

いやいやそんな、いえいえこちらこそと、この場はすっかり謝り合戦の様相を呈する。

(なんだこれ……)

昨夜知り合つたばかりの男女が、朝のリビングダイニングでお互いに頭を下げ合つている姿はどう

か滑稽で、私はふつと噴き出してしまう。

「……ええと、それじやあこれでおあいこということで

迷惑をかけた私の台詞じゃないかもしれないけれど、こうでも言わないといつまでも謝罪し合うことになりそうだ。

荻原さんも「そうですね」と頷いて、頭を上げてくれる。

「……ところで、昨夜の出来事をよく覚えていらっしゃらないということは、その、昨夜の約束についても覚えていらっしゃいませんか？」

「え？ 約束？」

「ええっ！」

恋愛指南!? 私が？ 荻原さんに？ そんな約束をしたの？  
首を傾げる私に、荻原さんは少し残念そうな顔をする。

「実は、恋愛の仕方がよくわからない、女性の気持ちがわからないという俺に、齊藤さんがその、恋愛指南をして下さると」

「ええっ!?」

恋愛指南!? 私が？ 荻原さんに？ そんな約束をしたの？  
そ、そういうえば昨夜、居酒屋で……：

『恋愛の仕方あ？ 女心お？ うーん、それ、そんなに知りたいなら私が教えてあげようか？』  
『えっ』

『これも何かの縁だしねえ。荻原さんにはお酒も奢つてもらつたし、うふふ、この楓さんにドーンと任せなさあい！』

お酒で真っ赤になつた顔で、私はケラケラと笑いながら安請け合いをした。

『本当に、いいんですか？ ご迷惑では……』

『いいの、いいの！ 私こういうの大好きだし！ 大船に乗つたつもりでいていいよー！』

『ありがとうございます』

『ウエーイ！ 楓の恋愛指南役就任にカンパ一イ！』

『か、乾杯』

『私は厳しいぞー！ アハハハハ！』

こんな会話をした記憶が、一気に甦よみがえつてくる。

う、うわあ……！ 最悪！ 最悪だよ！ なんて大言たいげんを吐いたんだ私……！

確かに恋愛物語は大好きだよ？ でも、人に教えられるほど経験豊富じゃないでしようが！ なんだよ大船に乗つたつもりって！ 私は厳しいぞつて、アホか！

それに、恋愛指南役就任つて！ 自分で言つて乾杯するとか、うわあ、恥ずかしい！ 穴があつたら入りたいとはまさにこのことだよ！

頭を抱える私に、荻原さんは慌てて言葉をかけてきた。

「いえ、酒の席の冗談を真に受けた俺が悪いんです。ただ、本当に困つていて……。ご迷惑でなければ、ぜひお願ひしたいと……」

「…………」

私は咄嗟とっさに答えられず、悩んでしまう。

ど、どうしよう……

たぶん、荻原さんは私のことを経験豊富な恋愛のエキスパートだと誤解しているのだろう。そう思わせるだけの言動を、昨夜さんざんしてしまったから。

それを今更、「すみません！ 実は私、経験豊富どころか今まで彼氏なんて一人しかできなかつたし、それだつて浮気されてフラれちゃつた有様で、昨日の話はほぼ漫画や小説の受け売りなんです！」なんて……言えない！

期待の籠こもつた目で、縋すがるように私を見つめているこの人に、今さら本当のことは言えないよ！

「わ……かりました……」

気が付けば、私はこくりと頷いていた。

経験は少ないものの、知識だけはたくさんある。二次元に限定されるけど。

恋愛指南、できなくもないだろう……たぶん。

「本當ですか!?」

「た、ただし！ 必ずご期待に添えるとはお約束できませんが、それでもよろしければ」

「もちろんです。ありがとうございます」

かくして、私は荻原さんの恋愛指南役を務めることになつてしまつたのだ。

ああ、まさかこんなことになるなんて。

酒は飲んでも飲まれるな。

当分お酒は控えようと、私は固く心に誓つたのだった。

「はあ……」

（引き受けたはみたものの、恋愛指南つて、具体的にはどうしたらいいのかなあ……）

週明け、月曜日の午後二時すぎ。私は遅い昼休みを取りながら頭を悩ませていた。

悩みの種はずばり、先日断り切れずに引き受けてしまった恋愛指南のこと。

私が女心や恋愛についてのあれこれを教えることになった荻原さん——荻原智之さんは私より一つ下の二十七歳で、区役所にお勤めの公務員。あのあと、お互いに改めて自己紹介して、連絡先を交換し合つて別れたのだ。

一宿一飯の恩もあるし、引き受けたからには力になつてあげたいとは思う。

そこで、参考になればと家にある少女漫画や恋愛小説なんかを片つ端から読み返してみた。だけど、それをどう活かして何をどう教えたらいいのか、具体案が浮かばないのだ。

私はうんうん唸りながら、コンビニのおにぎりに齧りつく。ツナマヨのおにぎりとシャケのおにぎり、それからカツプのインスタント味噌汁が今日の私のランチだ。

うちの会社には社員の休憩用のスペースがあり、自販機と四人掛けの丸テーブルが四つ置かれている。昼休みの時間は特に決まっておらず、各自がキリのいいところで一時間の休憩をとることに

なつていた。

他の社員は十二時や一時ごろに休憩に入つたようだが、私は来客の対応があつてこの時間まで押してしまつた。そのため休憩スペースには他に人の姿はない。それに、食事休憩は自分のデスクでもどれるので、こちらに移動せず済ませる人もいるからね。

ちなみに、私はなるべく休憩スペースか外でランチをとることにしている。だって、自分のデスクだとあんまり休んでいる気にならないんだもの。周りで働いている人の目も気になるし。

私はおにぎりをもぐもぐと齧りながら、鞄からあるものを取り出した。

（とりあえず、これも参考になるかなあ）

今日、通勤途中で買った漫画の新刊である。

ちよつとドジなOのヒロインと、黒髪眼鏡でDのヒーローの、ちよつびりエッチな恋愛モノ。ヒーローがとにかく恰好良くて、「きやああ」とのたうち回りたくなるような胸キュン展開が読者の支持を集めている、人気シリーズなのだ。

私は片手におにぎり、片手に漫画という行儀の悪い恰好で黙々と漫画を読み進めた。

うちの会社では、昼休みに漫画を読んでいる人やゲームをしている人かけつこういるから、咎められることはない。ただ、何を読んでいるか知られるのは恥ずかしいので、会社で読む時はカバーをかけることにしていて。この本も本屋さんでカバーをつけてもらった。

漫画を読んでいるうちに話に引き込まれ、おにぎりを齧るのも忘れた私は、夢中でページを捲く。ヒーローに想いを寄せるライバルの策略で、すれ違つてしまつた一人。誤解したまま終わつてしまつた。

まうのか、それとも……！　という最高に盛り上がったところで――

「こらっ、お行儀悪いわよ楓！」

私の手から漫画が取り上げられてしまう。

「ああっ！　今めちゃくちやいいところだつたのに！」

「食事しながら漫画読むんじゃないの、もう。食べてから読みなさいよ。お味噌汁だつて冷めちゃうわよ」

まるで母親のような苦言をよこしてきたのは、仕立ての良いスーツに身を包んだ長身のイケメンだつた。

ジムで鍛えているという細マッチョな身体。アッシュベージュに染められた髪はお洒落に整えられ、本人の華やかな顔立ちをより引き立てている。

「あらあ、これつて宝田センセイの新刊じやない。もう出てたのね」

そう言つて、彼は私の向かいに座るといそと漫画を読み出した。

「先輩。それ、私の本なんですけど……」

「会社では社長つて呼べって言つてるでしょ？　ほら、私が読んでる間に食べちゃいなさいよ」この見た目はイケメン、中身はオネエな人物こそ、我が社の社長であり私の大学時代の先輩でもある神崎拓馬。ちなみに、かつて元カレが私の浮気相手と疑つた人物でもある。

だが先輩の恋愛対象は男性、つまりゲイだ。

故に、彼にとつて私は恋愛対象ではないし、私もそうだ。

先輩がオネエであることは会社の人間や親しい友人しか知らず、世間一般ではイケメン実業家として名が知られている。ええ、取り引き先のOLさん達からもモテモテですよ。私が営業のお供を務めると、嫉妬の視線を向けられることが多々あります。

私は、はあ……とため息を吐いて、食べかけだつたおにぎりをもしょもしょと齧り始めた。

こうなつたら先輩は読み終わるまで返してくれないだろう。何せ彼は、私以上にこの手の漫画や小説が大好きなのだ。

そういえば、大学で違う学部だつた先輩と親しくなつたのも恋愛小説がきっかけだつた。

入学したばかりのある日、私は何年も止まつていたシリーズの新刊がようやく発売されて浮かれていた。退屈な講義の時間にこつそり読もうと、教材と一緒にその本を持つて移動していたら、角を曲がつてきた先輩とぶつかつて、本を落としてしまつたのだ。

当時からイケメンで有名だつた先輩と廊下でぶつかるなんて、恋愛モノではよくあるシチュエーションだろう。かくいう私も一瞬ドキッとした。

だが私が落とした本を拾つてくれた先輩は、次の瞬間……  
『きゃああああー！　これつ、「エメラルドの海」シリーズの最新刊!?　うつそお、もう出ないと諦めていたのに、発売されたの!?』

オネエ言葉でそう絶叫したのだ。

突然の事態にしばし固まつていた私だが、「エメラルドの海」シリーズについて熱く語る先輩に同調し、意気投合。愛読書が似通つてることがわかり、先輩が入つていたコンピューター

サークルに勧誘され、それからずつと付き合いが続いている。

まあ、そのサークルもほとんどが幽霊部員で、私と先輩はもっぱら部室で愛読書トークに花を咲かせていたんだけどね。

「それにしてもアンタ、相変わらず貧相なランチねえ」

私が過去の記憶に思いを馳せていたら、先輩がため息まじりにそんなことを言い出した。

「いいじゃないですか。お手軽だし、安いし。コンビニのおにぎりもけっこう美味しいんですよ」「栄養バランスが悪いじゃない。いいかげんちゃんと自炊しなさいな。食生活はお肌に出るるよ～」

「うつ」

痛いところを突かれた。

確かに、最近お肌の調子があまりよくない。

「昨日の夜、たっぷりパックしたんだけどねえ……」

先輩の言う通り、食生活を見直さないといけないのかなあ。

でも、料理するのは苦手だし面倒くさい。

「ちゃんとお野菜食べないとダメよお」

かくいう先輩は、姫ましくいくらい綺麗なお肌だ。くつ……！

先輩は料理も得意で日頃から食事に気を配っているし、しかも昨日エステに行つてきたばかりらしい。

なんでも最近気になる男性ができるたそうで、その人を落とすためにいつそう自分磨きに励んでいるんだとか。

先輩のそういう努力を惜しまないところは、素直に尊敬している。

「どつても気持ち良かつたのよお。おかげでお肌もスベスベだし。ね、今度楓も一緒に行かない？」

「エステかあ……！」

最近、全然行つてないなあ。

「ほらあ、やっぱり見た目って大事じやない？　あの人の前では、いつだつて最高に綺麗な私でいたいのよお」

「ですねえ……つて、あ！」

「どうか、見た目だ！」

荻原さんについて、何から手をつけていいかわからなかつたけど、まずは見た目の改善からやつてみよう。

先輩の言う通り、恋愛において見た目は大事ですからね！

荻原さんはダサい……というほどではないけど、ちょっと地味な外見だ。髪形と、あと眼鏡を変えたらもっと恰好良くなると思うんだよね。せっかく整つた顔立ちなんだから、それを活かさないと！

「ありがとうございます、先輩！」

おかげでずっと悩んでいたことが解決しました。ああ、すっきりした。

「？どういたしましてえ？」

私はきよどんとしている先輩の前で残りの昼食を平らげると、はりきつて午後の仕事を片付けた。

そして、その週の日曜日。私は荻原さんと駅で待ち合わせていた。

ううう、異性と待ち合わせて出かけるなんて何年振りだろう……

ちなみに神崎先輩とはよく食事や買い物に行くが、私の中であの人は女友達枠なので、異性からは除外している。

今日は恋愛指南の初日。一応プランは立ててきたけれど、私なんかにちゃんと指南役が務まるか不安だ。

緊張しながら待ち合わせ場所に向かうと、荻原さんの姿を見つけた。

(待たせちゃったかな)

腕時計を見ると、現在の時刻は午前九時四十五分。待ち合わせの五分前だ。もっと早く来ればよかつたかもしれない。

彼は背筋を伸ばし、書店のカバーがかかった文庫本を真剣な眼差しで読んでいる。

その姿が妙に様になつていて、私はしばし遠目に彼を見ていた。けれど、待ち合わせをしていることを思い出し、はつとして駆け寄る。

「お待たせしてすみません！」

「いえ、待つたといつても十五分ほどですし」

十五分……。そ、そんなに早くから来ていたのか……

そう言われると、ますます申し訳無い気持ちになる。

「ええと、こういう時は嘘でも『俺も来たばかりですから』って言つた方が良いですよ」

じやないと、相手も気を使つちやいますからねと苦言を呈<sup>てい</sup>すると、荻原さんは思い当たることがあつたのか、神妙な顔で頷いた。

たぶん、これまでのデートでも正直に言つちやつてたんだろうなあ。

「でも、相手を待たせまいと早めに行動する姿勢はどつても良いと思います」

指摘するところはちゃんと指摘して、褒めるところはちゃんと褒めなくちゃ。

あ、なんだか恋愛指南っぽいかも。よ、よし。この調子で頑張ろう。

「ありがとうございます」

「いや、頭は下げなくていいですよ！」

こんな人通りの多いところできつちり四十五度のお辞儀をされたら、何事かと注目されちゃうよ。

「ところで……、今日はもしかしてお仕事でした？」

何故私がそんなことを聞いたのかというと、荻原さんがスーツ姿だったからだ。

「いえ、あの……。恥ずかしながら、何を着て行つたらいいかわからず……」

おおう……、マジですか。

恋愛指南初日ということで、荻原さんも気負っているのだろうか。かくいう私も、今日着ていく

服に一小時間悩んだんだよね。

だ、だって男の人と二人きりで出かけるなんて、ものすごく久しぶりだつたから……！

私はちょっとぴり微妙な気分になりつつ、荻原さんに聞いてみる。

「えっと、今まで彼女とのデートの時とかはどうしてなんですか？」

「スースでしたね。仕事帰りに食事に行くことが多かつたので……」

「休日は？」

「……スースが多かつたです」

それはそれは……

どうやら恋愛指南初日だから気負つたとかではなく、ただ単にデートで着る服に迷つた結果、無難なスースに落ち着いたらしい。しかも常習犯。

服装に迷う気持ちはよくわかるけど、休日デートまでスースでは、相手の女性も堅苦しく感じたんじゃないかなあ。それくらいは、恋愛初心者の私にも察せられる。

「よし、それじゃあ今日はデート用の服も見てみましょうか」

「よろしくお願ひします」

今日の外出の目的は、荻原さんのイメチェンである。

恋愛指南の手始めとして外見をちょっといじりたいと具体的なプランをメールで送つたところ、荻原さんが快く了承してくれたのだ。

時間に余裕があるので、服を見て回ることもできるだろう。

(ふう)

ここまでボロが出なかつたことに、私は内心で息を吐く。

恋愛指南の先生と生徒という間柄とはいえ、久しぶりの男性との外出にちょっとぴりドキドキしつつ、私は荻原さんを最初の目的地である美容院に案内した。

待ち合わせた駅から歩いて五分ほどの距離にある美容院は、ここ数年私がお世話になつてゐるお店だ。完全予約制で、美容師さんが三人で切り盛りしているこぢんまりとしたお店なので居合わせるお客様が少なく、静かで居心地が良いんだよね。もちろん、美容師さんの腕も良い。

「ここにちは～。予約していた斎藤ですが」

「いらっしゃいませ、楓さん。今日のご予約は……こちらのお客様ですね」

店内に入ると、私の担当をしてくれている女性美容師さんがすぐに出迎えてくれた。

彼女の微笑ましげな視線は「彼氏ですか？」と問いかけているようで、ちょっと居心地が悪い。違いますからね！」

「はい。今日は彼を。えっと、公務員なのであまり明るい色や奇抜な髪形はダメなんですが、おまかせで恰好良い感じにしてもらいたいんです」

私の曖昧な注文を、美容師さんは笑顔で「おまかせ下さい」と請け負つてくれた。

そして美容院は初めてで緊張しているという荻原さんを送り出し、私は待ち合いスペースで待たせてもらう。

私もお願いしたかつたけれど、そうなるとカットだけじゃなくカラーやトリートメント、パーマも一緒にやりたい。それだと荻原さんを長時間待たせてしまうことになるから、また今度だ。

次に来た時のために、置かれている雑誌を見ながらどんな髪形がいいか考える。そして、スマホを取り出してメンズファッショントを色々見ながら荻原さんの私服について検討していたら、あつという間に時間がすぎた。

来店して約一時間後。カットを終えた荻原さんが、照れ臭そうに私の前に現れた。

「あの、どうでしようか……？」

「わあ……、すごく良いですよ！ 恰好良いです」

お世辞ではなく、本当に恰好良かつた。ちょっとドキッとしてしまったもの。

髪は染めなかつたらしく、綺麗な黒髪はそのままでお洒落にカットされている。

前髪も短めなので、彼の整つた顔が露わになり、今までのやや地味な印象が一転、明るくて爽やかな雰囲気に変わっていた。

髪形一つでこんなに垢抜けて恰好良くなるんだもんなあ、すごいや。

しかも、自分の変わりように戸惑っている様子の荻原さんはなんだか初々しくて、可愛いと思つてしまふ。

「自信作です」

美容師さんも満足そうに荻原さんを見ている。

うんうん。確かにこれは大満足の仕上がりだ。荻原さんイメチェン計画の第一段階は大成功だね。

「それじゃあ、次に行きましょうか」

私達は会計を済ませると、次の目的地であるショッピングモールに向かつた。

ショッピングモールに来てまず向かつたのは、眼鏡屋さんである。

荻原さんが今かけている銀縁眼鏡も悪くないんだけど、せっかく髪形も変えたんだし、眼鏡もお洒落してみようと思ったのだ。

「あ、これなんてどうですか？」

とりあえず、目についた眼鏡を片つ端から試してもらう。

こればっかりは、実際にかけてみないとわからないからね。

試着用のフレームには当然度が入つていないので、荻原さんは自分ではよく見えない。そのため似合つているのかわからないと、私に眼鏡選びを一任してくれた。

人の眼鏡を選ぶなんて初めてだけど、けつこう楽しい。  
「……うん。やっぱりこれが一番似合いますね」

いくつかの眼鏡を試着してもらつた末、私は黒縁の眼鏡を手にとつた。

スクエアタイプの細めの黒フレームはシンプルで、荻原さんによく似合つている。テンプルにさ

りげなく赤のラインが入つていて、とてもお洒落だ。

私はもう一度荻原さんにそのフレームをかけてもらい、自分のスマホで写真を撮ると、元の眼鏡をかけ直した彼にスマホの画面を見せた。

## 立ち読みサンプルはここまで